

また、これは西欧の中近世（中世・近世）の話ですが、一四世紀から一七世紀にかけてのヨーロッパで、黒死病といわれた風土病が流行し、多くの犠牲者が出ました。つい最近、この方面に関わる著作（石坂尚武『どうしてルターの宗教改革は起こったか』）を読んでいたら、イタリアのフィレンツェなどでは、一四世紀半ばで十二万人いた人口が、同世紀の末にはわずかに六万人程度にまで激減したといえます。しかも四回にわたって周期的に発生した流行時には、毎週三桁におよぶ数の人々が疫病死することもあったらしいです。

こうなると、人々はパニック状況となり、それが数万人ともいわれる女性に犠牲を強いることになったのです。すなわち、この時、時の権力者やカトリック教会の関係者等は、民衆の不満が自分たちに向かうことを恐れて、ちょっと変わったタイプ（存在）の女性に対する攻撃を黙認もしくは煽りました。それが有名な魔女狩りの流行に繋がりました。

こうした黒死病の流行や洪水、地震、飢饉、火山の噴火などの発生を、不信心な人間に対して神が怒った結果（「神罰」）だと「解釈」し、怒りの対象が特定の女性に向かうのを黙認し、煽ったという次第です。いまでは、黒死病の原因はペスト菌だとされています。すなわちクマネズミに寄生していたノミがペスト菌を人間の血液中に注入することから握る病気だということが明らかにされましたが、当時にあつてはこうした迷信が多く女性の生命を奪ったのです。

前章で、歴史学の特色は、物事を原因と結果という因果関係で把握するところにあると書きました。僕などは、歴史学を長年にわたって勉強してきて、つくづく良かったなと思えることのひとつに、この把握（認識）の仕方が徹底して身についたことがあります。

例えば、これといった趣味の無かった僕は、ストレスをうまく発散できずに、やや過度の飲酒にはしり、結果的に数年前に**大腸と直腸を全摘**する羽目に陥りました。ところが、こういう結果になったのは、ストレスや飲酒、それに遺伝等の問題が原因として大きく関わつただろうかと冷静に原因を見極めることができ、ついで十分に結果を「納得」しえたため、すごく楽な気分で手術の日を迎えられました。これは、ひとえに歴史学を学んだおかげだと感謝しています。

具体的な事例を挙げますと、西郷は、徳川家を支配の頂点にいただく体制（幕藩体制といわれます）を打倒するうえでもっとも大きな役割をはたしたあと、なんら具体的なヴィジョン（展望）を示すこともなく、突如明治六年（一八七三）に、当時鎖国政策をとっていた李氏朝鮮を開国させるべく説得にあたる使節への就任を強く主張しました。

これはどうやら自分が**朝鮮の地で殺されることで李氏朝鮮を討つ名目**を獲得し、そのことで二年前に行われた廃藩置県で職を失った多くの武士に活躍の場を提供しようと考えたためのようです。しかし、大久保利通らの反対運動にあって、それが実現をみないとわかると、さっさと郷里の鹿児島に帰ってしまいました。

中国古代の書に『春秋左氏伝』があります。これは、江戸期に生きた武士などは、ほぼ全員、若い頃に強制的に読まされた必読書の一冊です。そして、その内容ですが、これは中国の古代史に登場する人物に対して、彼らの行為を善い点と悪い点に分けて、厳格にさばくものでした。なお、江戸期にあっては**歴史を学ぶというのは、中国の古代史を学ぶことに他なりません**でした。すなわち、当時の人々は、『史記』や『十八史略』『資治通鑑』（しじがんと）といった中国の古代史について記された書物を若き日から徹底して読まされ、こうした書物の中に登場する人物の行動の是非などを介して自分の考えを相手に伝えることが一般的でした。

右翼と左翼の違いは、ごく簡潔に書けば、右翼が自分の国の歴史や文化、政治の優秀さを過度に主張することで、民族としての誇りを顕揚しようとするのに対し、左翼はそうした立場から距離を置く社会主義、共産主義の考え方です。そして左翼思想の根底にある歴史観が、これから取り上げるマルクス主義史学です。

マルクス主義史学の問題点を、もう少し指摘しておきます。マルクス主義史学においては、階級闘争史観と並んで、もうひとつ、俗に「発展的歴史観」と称された魅力的な史観が提示されました。これは、先ほども一寸指摘したように、過去から現在に至る人類の歴史過程の中に、一貫した基本的な筋道を見いだそうとする見方です。すなわち、**人類のたどる歴史過程は歴史的必然性ともいべき「法則」に基づいて発展していくのだ**としました。

ここにマルクス主義史学が広く受け入れられた理由の一斑があります。それまでは、これまた先ほども一寸指摘したように、歴史というのは恣意的な学問だとややもすれば捉えられがちでした。歴史愛好家が、自分が思いつくまま、気楽に自分の解釈を一方的に表明するものだとされがちでした。だが、マルクス主義はそれを「科学」の列に引き上げたのです。

では、その**すべての国の歴史に当てはまる「世界史の基本法則（発展段階論）」**とは何か。これは、人類の歴史は、①漂泊しながら、獣を狩り、魚を捕り、木の実などを採集する未開・後進的な段階（原始共産制）から、②定住して、農業・牧畜を行う中進的な段階（古代奴隷制・中世封建制）に移行し、最終的には、③工場に勤めたり、各種の産業に従事する人々を生み出す先進的な段階に達するというものです。

また、食べ物や衣類を自分たちで賄う自給自足経済の段階から、余剰生産物の販売を通じて貨幣・商品経済の段階へ移るともされた。すなわち人類は、こうして、未来に向かって、然るべき段階を経て進んでいき、**最後は共産主義にいきつくのだ**とされたのです。

・・・

さらに、いささかしつこくなりますが、僕などは、マルクス主義史学の描いた見通し（図式）は大変わかりやすいものの、歴史過程をひどく単純化して、ひとつの見方しか許さなかったため、かえって歴史そのものの魅力を半減させたのではないかと考えます。

海洋を挟み、周辺の民族や国家間の関係の中で歴史過程を見ていこうとする研究では、いま挙げた事例研究からも明らかなように、たったひとつの言語だけでは対処しえません。僕らが歴史研究に取り組みはじめた頃は、外国語が苦手だから西洋史や東洋史を避けたという連中も多く、他ならぬ僕もそのひとりだったのですが、近年ではそうはいきません。

日本史の研究者といえども、英語はもちろんのこと、中国語や韓国語にも通曉していなければならなくなりました。なお、さらに指摘すれば、二〇二二年度から高校で日本史と世界史を融合させた『歴史総合』が必修科目として教えられるようになった（予定）のも、むしろ、こうした動向と無関係ではありません。

日本人は昔から「水に流す」ことを美德として教えられてきました。これは、過去のことをとやかくいわず、すべて無かったことにするのが、立派な人間の心がけるべきことだとされてきたということです。もちろん、主たる対象とされたのは、個人間の喧嘩レベルです。だが、日本人の場合は、こと個人間のいさかいのレベルに止まらず、対外的な関係においても、同様な態度をとろうとしたことが大きな特色です。そして、よく政府の指導者が口にする「未来志向でいこう」といった発言はこの主旨に沿うものです。

確かに、日本人ほど過去に起こったことを引きずらないように見える国民はいないかもしれません。僕などは不思議で仕方がないのですが、広島と長崎にアメリカ合衆国によって原爆を落とされ、多くの犠牲者が出たにもかかわらず、日本は世界一の親米国となっています。これも、「水に流す」ことを美德とする国民性の表れなのでしょう。しかし、日本以外も、そうかといえば、まったく違います。他国では、酷い被害を受けた記憶は容易に（ほぼ永久に）忘れ去られません。そして、自国民に対する歴史教育において繰り返し、このことが教えこまれます。

『歴史総合』では、一八世紀以降の近現代史にかなり特化した内容のものとなるようです。これは、現代を生きることになる若者には、とくに一八世紀以降の近現代史に関する知識が必要不可欠だとされたからでしょう。

~~~~~

それ - がし【某】

1 不定称の指示代名詞。その名がわからない人や事物をさす。また、その名をわざとぼかしている場合にも

用いる。だれそれ。なにに。某(ぼう)。なにがし。

2 一人称の人代名詞。わたくし。

~~~~~

続いて、今度は目線を変えて、歴史を学ぶうえでの前提条件となる読書の効用について語ろうと思います。先ほど「余人をもって代えがたい」存在にならない限り、究極的には自分を守れないだろうと書きました。そして、このことば、近年になればなるほど切実な課題(努力目標)として我々に突きつけられるようになったと断言できます。なぜなら、これからの社会ではAI(人工知能)やロボットの登場で、事務労働者(一昔前はホワイトカラーと呼ばれていました。白襟の服を着て事務所で働く人という意味です)の仕事が無くなるとの予測が樹てられているからです。その代わり肉体労働者(一昔前はブルーカラーと呼ばれていました。青襟の服を着て現場で働く人という意味です)の仕事と賃金がともに増えるだろうと予測されています。

読書の効用というのは、たくさんあると思います。例えば、これは多くの人が強調することですが、本を読むことで視野が広がります。視野が広がるということは、自分の無知に気付くとともに、自分の視点や思考の幅が広がるということです。

人間は放っておけば、どうしても自分の置かれた環境に規定され、狭い視点しか持ちえません。それが本を読むことで、他人や世界各地の人々のあらゆる考え方や生き方などを学ぶことができるようになります。そして、このことが、結果的に物事を俯瞰的に、つまり高い所から眺められることに繋がります。また、「人を見る目」を養ってもくれます。

それに第一、狡いことを記すと、先人が長いあいだかかって営々として培ってきた知見を借用することで、時間を無駄にしないで済みます。すなわち、本来ならゼロからはじめねばならないところを、書物の中に記された先人の知見を参照することで、どんどん前進できるのです。こんな有り難いことばありません。

さらに有り難いのは、本は何度も読み返せることです。すなわち、一度読んだだけでは理解できなかったことや若い(子供)時分にやはり理解しえなかったことも、その後、何度も読みこんだり、あるいは人生経験を積み重ねた段階で改めて読むと、ようやくわかるといったことが、ままあります。その点で、映像のように、ややもすれば流れに身を任すだけで終わってしまうといったこともありません。

また、これはわかる人にはわかることですが、読書の習慣を身につけていれば、退屈がまぎれる(有効に時間がつぶせ、ひとりでも孤独感に苛まれないで済む)という、他のなにものにも代えがたい利点があります。